
ライト

戦国兄弟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライト

【Nコード】

N5778R

【作者名】

戦国兄弟

【あらすじ】

十五歳のライトは名門、軍事特殊第一学院の新生。入学式当日から、剣呑な雰囲気にしてしまう。

プロローグ

気づいたら、こちらに笑いかけてくれたあの子も、さっきまで一緒に遊んでいたあの子も、そして隣で一緒に歩いていたお母さんも、みんな死んでいた。

僕は有力貴族の息子だった。王位継承権すら持っているほどである。現王のいここだ。

僕のお父さんは將軍で、一度戦に出れば必ず一定以上の戦果を挙げていた。しかし、普通の貴族が持っている『身分意識』などなく、どちらかというと貴族よりも平民の方が好きそうに見える。

お父さんは僕に積極的に「町へ行きなさい」と言ってくる。だから、僕はほとんど毎日町へ出かけた。ちなみに、お父さんが將軍なのにもかかわらず、僕は一度も券を持ったことがなかった。

そこで、友達ができた。そこで、好きな人もできた。そして、毎日夕日が沈み始めた頃になると必ずお母さんが迎えに来てくれた。そんな風に僕は育ってきて、これからもそのように暮らしていけるのだと思っていた。

しかし、十二歳になったある日、それはまるでガラスが割れるかのように砕けてしまう。

その日も僕は町へ出かけた。その日、僕は好きな人に告白しようとしていたのだ。僕は周りの人に聞こえてしまうのではないか、と思ってしまうほどに胸が高鳴りしていた。なにしろ、好きな人に告白するのだ。小さい頃から好きだったあの子に告白するのだ。胸が高鳴りするはずである。

まだ、あの子に会ってもいないのに僕は既に緊張していた。第三者が見たら僕が將軍の息子だと気づくことは絶対にはないだろう。ショートヘアの黒髪を小刻みに揺らしながら、僕は走っていった。

僕はいつもどおり遊んでいる途中にあの子を緑がきれいな広場に連れて行き、彼女の瞳を見た。困った顔をしていた彼女の真っ黒の瞳を見て、僕はようやく覚悟がついた。

「ず……ずっと、す、す、好きでしたー!」

緊張していたせいか、言葉を嚙んでしまったが、なんとかこう言えた。自分の内なる心に秘めた気持ちをさらけだし、あまりにも恥ずかしすぎて僕はうつむいてしまった。

彼女の瞳をもう一度見るのが怖かった。恐る恐る、顔を上げて彼女を見る。

すると、彼女の雪のような白い肌が赤く染まっていた。彼女は恥ずかしそうに微笑んでいる。

「わたしも、好きだったのよ……?」

彼女はこう答えてくれた。

僕が喜んだのは言うまでもない。まるで、背中から羽が生えて空へ飛んで言った気持ちだった。

それから僕たちは、再び遊びの輪に入る。そして、お母さんが迎えに来た。

「じゃあね」

僕は手を振りながら歩いていく。

彼女も「また明日ね。今日約束したこと、ちゃんと守ってよ?」と返してくれる。彼女の頬がかつと赤くなる。

「もちろん!」

そう元気よく言った、そのときだった。

不意に耳元でビュツという音が鳴る。それと同時に細長い何かは僕の横を通り過ぎて行った。

瞬間、僕の背筋は凍った。その何かは彼女の胸に刺さったのだ。彼女は胸を掴むように倒れた。すると、彼女と同じように周囲の人

々も倒れていく。まるで、悲鳴すらなかった。

僕はあまりの恐怖で立ち竦んでいた。そんななか、突然誰かに抱え上げられる。

「ッ！——」

僕の瞳にお母さんの顔が映った。

「大丈夫、大丈夫よ」

そう言いながら、お母さんは僕を抱えながら路地裏まで行こうとした。

その目的は達成されようかと思えた。だが——

お母さんの顔が痛みによって歪められる。僕を抱えあげるお母さんの力が急に消え、僕は立ち、お母さんを支えた。見ると、背中にナイフが刺さっていた。お母さんの胸は上下に動いていたので、心臓には刺さっていないようだ。

「お母さん！」

僕はそう叫んだ。

「あなたは……生き延びな、さい」

「いやだ、いやだ」

僕は泣く。背中から血が吹き上げる。致命傷ではなかったが、このままでは出血多量で死んでしまう。そんななか、お母さんは「うっ」とうめく。背中にもう一本ナイフが刺さっていた。

それが致命傷となり、お母さんの体に入っていた力が完全に抜けてしまう。

そこで、「大丈夫か！」という低い男の声が聞こえてくる。

「お父さん！」

涙でくしゃくしゃにゆがんだ顔を上げる。

お父さんは鎧を着ていなかった。異変に気づき、すぐ来たのだらう。

こちらの方へ駆け寄ってきて、お父さんは哀しい顔をする。だが

「おい、シユス！」

一人の男性が駆け寄ってくる。僕も知っているお父さんの副官だ。
「息子を安全なところへ」

ただそう言い、お父さんは僕から離れていく。襲ってきた謎の集団に向かって走っていく。

僕はシユスに連れられながら、見ていた。お父さんが長剣で斬られるところを――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5778r/>

ライト

2011年10月8日20時50分発行